

補助事業番号 20-1-090

補助事業名 平成20年度 アジア映画コンペティションの開催 補助事業

補助事業者名 (N) 東京フィルメックス実行委員会

1. 補助事業の概要

(1) 事業の目的

ア) アジア映画コンペティション開催

昨今、「日本映画が好調」など興行的側面が話題に上り、映画においては動員数といった数字が価値基準の全てであるかのように映る。確かに産業的側面を見ると多額の資金を費やし、製作・権利売買される映画にとり興行的成功は重要な側面である。しかし私たちは映画の価値基準は動員数、興行収入といった数字だけではないと考える。作り手がいかにして素材であるテーマに取り組んでいるか—この〈作家性〉という価値感に指標を見だし、産業の枠内にある民間企業の映画会社ではカバーできない部分をNPO法人として補完し、公開規模や宣伝費の多寡にとらわれない公共的な側面から映画文化を支えることを目的とする。

1980年代以降、世界の「映画の現在」をリードしてきたヨーロッパの国際映画祭では、〈作家性〉が強く認められるアジアの新進監督に注目し、活躍の場を与えてきた。アジアからは台湾の Hou Hsiao-hsien、イランの Abbas Kiarostami、日本の北野武など多くの作家たちが映画祭に発見され、育てられてきた。日本にも“映画”と“映画作家”が主役であり、世界から必要とされる、真の意味におけるアジア映画コンペティションが行われる国際映画祭が東京になくはない。以上の理由から本事業（国際映画祭「東京フィルメックス」）の実施を計画した。

東京フィルメックスは、アジアを中心に過去20年にわたり、世界の映画の最先端に精通した2名のディレクターが新進作家たちの将来性も踏まえてプログラミングにあたり、製作予算の大小に関わらず既成の概念にとらわれない強烈な作家性のあふれる作品を紹介していきます。出品が契機となって日本での商業公開が決定したり、あるいは次回作の実現につながる、日本映画を海外に発信するといった「新しい才能に道を開くこと」が我々の果たす使命と捉えている。

本事業は以上をもって公益の増進に寄与する。

(2) 実施内容

ア) アジア映画コンペティション開催

「心を豊かにしてくれる真のアジア映画を、海外に発信する国際映画祭を開催し、もって公益の増進に寄与する」目的を遂行するため、「第11回東京フィルメックス」を実施して、日本をはじめとするアジアを中心に厳選した、主に新進作家たちの独創性豊かな作品群を日本の観客に紹介し、作家たちと日本の観客との創造的な交流の機会を提供し、かつ体系的に海外に発信させる。

実施会期： 11月22日(土)～30日(日)計9日間

実施会場： 東京都千代田区・有楽町朝日ホール (11/22-30)

東京都千代田区・有楽町朝日スクエア

東京都中央区・東京国立近代美術館フィルムセンター大ホール

東京都千代田区・シネカノン有楽町1丁目

東京都千代田区・MARUNOUCHI CAFE

上映作品数： 39 作品、65 プログラム、63 回上映
総入場者数： 16,836 人
登壇ゲスト数： 69 人
セミナー数： 19 プログラム

●会場別 (全 9 日間)

有楽町朝日ホール (8 日間、32 プログラム、31 回上映)
フィルムセンター (8 日間、12 作品、24 回上映)
シネカノン有楽町 1 丁目 (8 日間、8 作品、8 回上映)
有楽町朝日スクエア (7 日間、セミナー10 プログラム)
MARUNOUCHI CAFE (6 日間、6 プログラム)

●上映作品(部門別)

1) 東京フィルメックス・コンペティション：

アジアの新進作家による、独創的で文化多様性の追求をかなえる作品を上映するコンペティション部門。

国内外の計 5 名で組織された審査員が最優秀作品賞と審査員特別賞を選び、最終日に表彰する。全作品の監督をゲストとして招き、可能な限り上映後に観客と質疑応答を行った。10 作品上映。

2) 特別招待作品：

作家性に富み、かつ現在の映画製作のトレンドを示す新作を紹介する部門。全作品の監督をゲストとして招き、可能な限り上映後に観客と質疑応答を行った。12 作品上映。

3) 特集上映：

映画史に足跡を残す重要な映画作品を特集。日本で紹介されていない海外の巨匠や、海外に知られていない日本の作家を特集し、国内外の映画人や観客に広く紹介する。

a) フィルムセンターと共催で英語字幕付き日本の巨匠特集

「蔵原性繕監督特集－狂熱の季節－」(12 作品上映)

b) 「ジョアキン・ペドロ・デ・アンドラーデ監督特集～ブラジル映画の奇跡～」

(5 作品、3 プログラム上映)

4) 関連イベント

会期中、来日ゲストや日本の映画人をパネラーに招いた入場無料のセミナーを実施。またアジアの映画作家の魅力を社会へ拓く交流プログラムを行った。前者は映画ファン、映画を志す若者から実務にあたるプロ対象。後者は文化芸術に関心を抱くいわゆる映画ファンでない方々まで対象としたプログラム。これにより映画上映以外の形でもアジアの若手の才能の発信する機会を設けた。

2. 予想される事業実施効果

①アジア映画コンペティション開催

2000 年に誕生した国際映画祭「東京フィルメックス」。第 9 回目となった今年も日本をはじめとするアジアを中心に厳選した、主に新進作家たちの独創性豊かな作品群を日本の観客に

紹介し、作家たちと日本の観客との創造的な交流の機会を提供しつつアジアの映画を広く世界に”発信”する「コンペティション」と同時に、「特別招待作品」や「特集上映」では国籍に関係なく「現在の世界の映画のトレンド」を包括的に”受信”するという”受発信基地”としての役割を広く印象づけ、動員も16,836人と前年(=18,627人)比約10%減少したものの盛況のうちに閉幕した。動員の前年からの減少については、日本ブラジル交流年を記念して実施した特集上映(「ジョアキン・ペドロ・デ・アンドラーデ監督特集～ブラジル映画の奇跡～」)や特別招待作品でハンガリー、マケドニアといったこれまでの本事業では縁の薄かった地域からの作品の上映に対して、新規顧客獲得のための例えば東欧文化ファンへの働きかけが充分でなかった点にあると分析している。

今後は、そういった新規で取り上げる地域の作品に対して、映画ファン以外へのマーケットへの広報に重点を置き、取りこぼしをなくすようにしたい。

「受発信」の「受」について動員減少の原因は掴んでいるので、上記の対策を講じるようにし、前年度よりも多い、動員を次年度は挙げるようにしたい。一方で「発」については下記のとおり、本事業をきっかけとして日本映画等を世界へ発信し、かつロッテルダム映画祭、ベルリン映画祭フォーラム部門と着地された点で大きな成果が挙げられた。

●新しい才能の紹介

アジアのどの作家が2008年の現在「どこに目を向けているか」を見極めセクションした。その結果、近年本事業での馴染みあるイスラエルの「バシールとワルツを(公開題名「戦場でワルツを」)」(最優秀作品賞受賞)、レバノンからは過去にも紹介したジョレイジュ+ハジトゥーマ監督(「私は見たい」)、昨年も参加した中国のユー・グアンイー(「サバイバル・ソング」、審査員特別賞受賞)、香港のエミリー・タン(「完美生活」)などの作品に見られる、フィクションとドキュメンタリーの境界線に挑むような姿勢は「現在の映画の一つの重要な流れ」として無視出来ないことが浮き彫りになった。また「サバイバル・ソング」と審査員特別賞受賞を分け合った「木のない山」というフィクション作品においても、子ども達が演じるシーンはドキュメンタリー的手法が採用されているという一致もまた、偶然ではなく、上述作品と同様の理由からある必然ではないか、こんな議論が評論家や観客の質疑応答で繰り広げられ、また出品者同士の話し合いで明らかになった。また日本映画では、日本初のナショナル・フィルム・スクールとして2006年に発足した東京藝術大学映像研究科の第2期修了生である濱口竜介監督の「PASSION」がエントリーされた点は注目に値する。

長大な会話が繰り広げられつつも、フィルムとしての重量感を併せ持つという日本映画に希少な存在が、映画学校から現れたことに注目しつつ、胸を張って今年の日本映画の代表作として、主催者もコンペに選出した。もう1本の熊切和嘉の「ノン子36歳(家事手伝い)」もその後ロッテルダム映画祭で上映され羽ばたいたし、また特別招待作品では園子温の4時間の超大作「愛のむきだし」はベルリン映画祭で国際批評家連盟賞とカリガリ賞をW受賞するなど、日本映画の2008年の潮流もしかるべき形で発信することが出来たと自負している。

●うもれた作品の発掘

特集上映として2つの特集が組まれた。

- ・ 故人で生前に然るべき評価がなされなかった才能の再評価(ブラジルのジョアキン・ペドロ・デ・アンドラーデ監督)、
- ・ 海外では無名だが、日本が誇る財産を、英語字幕付きで世界に向けて発信する(蔵原惟繕)

とバリエーションに富んだプログラムとなった。

これらは貴重な鑑賞の機会になったことに加え、出品ゲストのみならず、現在、現役で映画を撮っている国内外の映画作家たちにも大きな衝撃を与えた。映画祭は出来上がった映画を紹介するのみならず、特集上映を充実させることにより、映画史の再考に取り組み、歴史から今後の映画が進むべき道・可能性を示すことが率先して出来る。ブラジルの国家プロジェクトとして2年前にヴェネツィア映画祭で修復プロジェクトの成果が発表されたこの「シネマ・ノーヴォの知られざる巨匠」を日本とブラジルの交流年に日本に紹介したことは意義深く、かつ石原裕次郎や浅丘ルリ子といった大スターを撮っていたドル箱の作家を体系的に併せて紹介するプログラムは意味ある挑戦であった。

3. 本事業により作成した印刷物等

ポスター	2,000 枚
リーフレット	20,000 枚
チラシ	80,000 枚
公式カタログ	3,000 部

4. 事業内容についての問い合わせ先

団 体 名：特定非営利活動法人東京フィルムメックス実行委員会

(トクテイヒエイリカツドウホウジントウキョウフィルムメックスジッコウイインカイ)

住 所：107-0052

東京都港区赤坂5-5-11 赤坂通り50番ビル 3F

代 表 者：理事長 蓮沼 健 (ハスヌマ ケン)

担当部署：事務局 (ジムキョク)

担当者名：スタッフ 金谷 重朗 (カナヤ シゲオ)

電話番号：03-3560-6393

F A X：03-3586-0201

E-mail：canalla@filmex.net

U R L：<http://www.filmex.net/index.htm>